

『何で切るんだよ!』

受話器の向こうは先ほどの声だった。

「椋のためになるかどうか分からないって言うから」

『だから最後まで聞けって。それで駄目ならそれでいいから』

最後には泣き声混じりの声。

「分かったわ。聞いてあげるから言いなさいよ」

『あ、おう。実はな』

「ところであんた誰?」

受話器の向こうで思いつきこける音。

『朋也だ! 岡崎朋也!』

「あ、朋也? 久しぶり」

笑いながら答える杏。

『……お前、最初から気付いてただろ』

「そりゃね。あんたの声は一年くらいじゃ忘れないわよ」

『? まあ、いい。で、話なんだが、そろそろいいか?』

流石に焦れたのか、受話器の向こうの朋也が訊く。

「いいわよ。何?」

『おう、実はさ、俺、今、渚と同棲してるんだが……』

ガチャ

トゥルルルル、トゥルルルル……

カチャ

『だから、何で切るんだ!』

受話器の向こうで憤る声。

「うるさい、このエロボケ! んなこと自慢したいなら、春原にでも電話しなさいよ」

『したよ、さっき』

「……そう」

杏は、朋也の声に真剣さを感じ取った。

だから、本当に真面目に聞いてみることにした。

「で、頼みって何？」

『ああ。あのさ、渚が、卒業したんだ』

「へえ。良かったじゃない。身体、元氣になったんだ」

複雑な気持ちで答える。

『いや、まあ、完全に元氣になったってわけじゃないんだ。結局卒業式は出られなかったし』

「……そう」

杏はつぶやくような声で、そう答えた。

ほんの数ヶ月の部活動。

渚という少女。

とても一生懸命で

いつも真剣で

誰もが守ってあげたくなるような女の子。

彼女のそばにいて、彼女を一番守っていたのが、朋也だった。

その二人をそばで見えていたのが、杏であり、棕だった。

棕が朋也に気があることは分かっていた。

だが、渚と朋也の間に割り込む事は、いかに強引な杏ですら出来なかった。

棕もそれで諦めたようだったので、杏もそれ以上は何もしなかった。

「で、渚がどうかしたの？」

『ああ。渚が卒業したんだけどな、卒業式に出てなくて、卒業証書だけもらったってのはさ、やつぱり寂しいと思うんだよ』

朋也の声は憂いを帯びる。

心の底から渚に同情しているのが分かる。

「……うん。そうね」

『だからさ、俺たちだけであいつの卒業式をしてやりたいと思うんだ』

それは、予想出来た言葉だった。

『他にもみんな呼んだ。智代————前生徒会長の坂上に幸村の連絡先聞いて、あのじいさんも呼んだ』

ああ、こいつならこれくらいするだろう。

熱中できるものさえあれば、夢中になって走り続けるような男だ。